

西田幾多郎は『思索と体験』の「三訂版序」で、「私は一度もカント的な認識論者となったことはないが、当時（京都に来た始の頃）は甚く新カント派の人々から動かされた」と書いています。たしかに、西田が京都帝大に就任した翌年、一九一一年に書かれた「認識論に於ける純論理派の主張に就いて」は、マーブルク学派や西南（バーデン）学派という、いわゆる「新カント学派」の認識論の解説としては、日本では最初期に属するものと見なされます。この論文で西田は、「カントよりもなお一層厳密にカントの立脚地を維持して之から認識論を構成する」人々を「純論理派」と呼んでおり、その代表者には、ヴィンデルバント、リッケルト、フッサール、コーヘンなどが挙げられています。またそれは、「超越論的感性論の前に超越論的論理がなければならぬ」という立場だともされていて、その後の『自覚に於ける直観と反省』に見られるように、西田は『善の研究』（一九一一年二月刊行）の前後から「純論理派」の研究を進め、「新カント派」の大きな影響を受けたということになるのでしょう。

他方で西田は、京都に来る前の一九一〇年まで、四高の教授として心理学、倫理学、論理学を講義していたのですが、そのいずれもが、当時の心理主義的認識論の代表者とされるW・ヴントの所論に依拠していたことが知られています。ヴントの思想は、帝大（東京）の元良勇次郎や中島力造によつて、一八九〇年過ぎから帝大哲学科の第二講座（心理学、倫理学、論理学講座）の中核となりました。西田は帝大で元良に学び、一九〇二年には自らヴントを研究したと述べています。一九〇五、〇六年頃までの心理主義への依拠と、その数年後の「純論理派」における、「たんに認識作用の心理的性質を論じて、之によつて認識そのものの性質を説明しようとするのは根本において誤っている。」という言明との間に、何があつたのでしょうか。『善の研究』刊行に至る数年間に、西田が「實在」、「純粹経験」、「意志」などを集中的に研究したこともよく知られています。すると西田は、この期間にジェームズの純粹経験などの考察によつて、まずヴントの心理主義から次第に離反し、次いで、新カント派の超越論的論理学を考えるようになった、ということなのでしょう。

こうした西田の思想の展開については、ジェームズやショーペンハウアーなどの思想、およびそれらと「純論理派」の「新カント学派」やフッサールとの関連を見ることが重要なのは間違いないでしょう。しかしながら概念史的には、すでに一八八〇年代から、「意識」、「経験」、「實在」、「論理」、「カント主義」などの思想は、西田のごく周辺に存在していたので、それでは問題の半分しか分らないことになります。心理学や倫理学については今回は省略しますが、たとえば西田が使ったヴントは、心理主義の代表者だと単純に分類できるものではありません。午前にはカントを講じ、午後には心理実験を行つていたヴントが、数次にわたつて刊行した『論理学』は、心理学から認識論や科学論までを含む、当時のドイツでの「新カント主義」の代表的な思想でもありました。また、京都帝大における西田の前任者だった桑木嚴翼は、上述してきた西田とほぼ同じ頃に、西田とは異なる意味での「論理」主義と経験的な「實在論」の結合を重視し、ベルリン大学の代表的な新カント主義者であるアロイス・リールに学ぶために留学したのですが、その当時のベルリン大学では、認識論のみならず、科学論、解釈学、心理学、論理学などとの関連で、数多くのカント講義が開講されていたことが知られています。

さらに、最近の西田記念館の復刻作業により、西田が論理学講義で参照した文献は、ウントと同時にボザンケーでもあったことが明らかになっています。一九世紀末英国の最重要な哲学者とされ、ロツエの形而上学や論理学の英訳者でもあるボザンケーは、T・H・グリーンを継ぐ英国理想主義(グリーン学派、オクスフォード学派)の中心人物でした。彼はブラッドリーと同じく、カントおよびヘーゲルの影響を強く受けており、同時に当時の英国でもっとも著名なカント学者だったハミルトンやベインの「思慮の法の学(思考の法則の学)」としての論理学を受け継いで、一八八〇年代から「知識の実在性とその法則の学」としての論理学を主張していました。そうした論理学の諸派の動向については西周やリンドセーの訳書によつて紹介されてもおり、西田がその出自を知らなかったとは思えません。

冒頭にあげた「認識論に於ける純論理派の主張に就いて」の後段では、主に前期のリッカートの所論についての解説がなされています。したがつてそこで西田の言うところの「新カント派」とは、主として西南学派のことなのだ、とそれなりに了解はできます。この言葉は一九三七年の『思索と体験』第三版の序のものであり、一九一四年の第一版では、「京都に來たはじめ、余の思想を動かしたものはリツケルトなどの所謂純論理派の主張と・・・」と書かれています。その段階では、「新カント(学派)」という名称はまだ定まっていなかったことが覗われるからです。とはいえ、このようにさまざまな視点で見るととき、西田が「新カント派」の影響を受けたという文言については、思想史的にも概念史的にも、もう一度それが何を意味しているのかをきちんと時代的に区分して検討してみることがあると言えるでしょう。